

文・井上千岳 Chitake Inoue Photo・Y.Kawamura

# 鮮やかな空間性と 精密な再現性が生々しい 極めてオーソドックスな逸品

独自のユニティグラウンディング思想で貫かれた  
オーソドックスに音質を追求したフォノアンプ

パイオニア、エクスクルーシヴに  
繋がる優美なデザイン。  
しかし筐体は強固精密



## MALC PH-3

フォノイコライザーアンプ  
¥1,870,000

S P E C

[M-1]

- 利得 ● 6dB
- 入力端子 ● 2系統(MC:100Ω/MM:50kΩ)
- 出力端子 ● 1系統
- RIAA特性 ● 20Hz~20kHz±0.2dB
- 利得 ● MM:36dB/MC:56dB
- 外形寸法 ● 270W×97H×375Dmm
- 重量 ● 9.5kg
- 問い合わせ先 ●  
MALC Tel.080-7796-2723

MALC (武蔵野オーディオ・ラボ・コミュニティ) はハンドメイドの受注生産を行うオーディオ・ブラ

極めて  
オーソドックスな設計  
電源にはトロイダルと  
低ノイズDC電源回路を  
搭載している

少し前にセパレート・アンプを紹介したMALCからは、フォノ・イコライザーも発売されている。同じUnity Grounding思想に基づいて開発され、アンプとシステムを構成する重要なアイテムである。回路構成も極めてシンプル。今回はこのモデルに焦点を当てて、ポリシーや特徴と共に音質を確認することにした。

なおオプションもいくつか用意されているが、詳しくは本文で触れる。



ンドとして、2019年に設立された。現在までPASIOシリーズのプリアンプ／パワーアンプと本機フオノ・イコライザーが発売されているが、また機器の修理やメンテナンスなども引き受けているそうだ。

同社の最も大きな特徴は、Unity Groundingという構成にある。アース関連の事柄だ。

電気回路は共通のアースがないと動作しない。これを特にシグナル・グラウンド（SG）と呼んでアースと区別するが、一般にはシャーシに接続して基準電位としている。こちらはフレーム・グラウンド（FG）と呼ぶ。Unity GroundはSGとFGを分離して回路のグラウンドをシャーシから独立させ、さらにLRも電源からグラウンドまで分離して完全な左右独立としているのが一般的な構成との違いである。シャーシはこれとは別に、機器間でアースを接続することが推奨されている。また電源ケーブルは、アースを接続しないことを標準とする。

回路自体は極めてシンプルなシングルエンド電圧伝送。電源にはトロイダル・トランスと低ノイズDC電源回路が搭載されている。

入力には2系統を装備するが、このうち一方をMMないしMCバランス

仕様とするオプションも可能である。また2芯シールドのRCAケーブルも付属するが、別に受注生産にも対応するということだ。

### 肉質感が高く みつしりと詰まった なめらかな味わい

アンプと同じく尖った歪みっぽさのない当たりの柔らかい音調で、聴きやすいだけでなく濁りのない心地よさを堪能させてくれる。当たりが柔らかいといっても腰の抜けた力のない音とは違い、肉質感が高くみつしりと詰まった手触りである。刺がないためそれがなめらかで伸び伸びとした感触にあふれているのだ。

バロックでは弦楽アンサンブルと独奏フルートがこのうえなく繊細に描かれ、旋律線の緩やハーマニーが非常に細かいところまではつきりと引き出される。解像度が高いのだが、それが音楽的な再現力として働いているのだ。出方が大変多彩で、同じ音楽が豊かで華やかに聴こえてくる。付属ケーブルに換えると余計丸みを帯びた音調が際立ってくる。背景ノイズが減少して汚れが解消される印象だ。フルートのニュアンスが一層きめ細かく、弦楽器の質感が澄んで響きも緻密に感じられる。

ピアノは等身大という感覚で、直近で聴くのではなく適正な位置での鳴り方が再現されているイメージだ。ステージのサイズと余韻の乗り方が楽器との距離感を正確に感じさせるのである。そこから出てくるタッチがまた実に本物の感触で、いかにも



バランス入力に対応する

### 試聴ソフト

- ▶『バッハ：管弦楽組曲第2番 第3番』  
ジャン・ピエール・ランバル（フルート）、  
カール・ミュンヒンガー（指揮）、  
シュトゥットガルト室内管弦楽団／ロンドン SLH1002
- ▶『ラ・カンパネラ〜ヴィルトゥオーゾ・リスト!』  
辻井伸行（ピアノ）／エイバックス／AVJL-25895
- ▶『メンデルスゾーン：交響曲第4番「イタリア」』  
ジョーシ・セル（指揮）、クリーヴランド管弦楽団／  
CBSソニー／13AC445
- ▶『カンターテ・ドミノ』  
プロプリウス／prop7762（海外盤）

スタジオでこう鳴っていたのであるという様子を彷彿とさせる。音色と弾力、歯切れのバランスがちょうどいい。レコードの音が正しく再生されているという印象を強くする。せっかくなのでオーケストラはバランス接続で聴いてみることにした。やはり柔和な出方だが、立ち上がりは速く逡巡したところがない。繊細な木管楽器に至るまで楽器ひとつひとつがはつきりと捉えられて勢いがよく、濁りがないため大音量になっても響きが透明だ。整然として暴れがなく、瞬発的な切れもいい。

コーラスは澄んだ質感が大変清々しく、オルガンのスケール感と声の響きがバランスよく描き出されている。教会の空間が見えるように遠近が鮮やかだ。精密な再現性が生々しさを一層掻き立てるのである。